様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４１５８

研究課題名（和文）依存問題を取り巻く社会環境と依存問題への支援に関する社会学的考察

研究課題名（英文）Sociological Considerations on the Social Environment Surrounding Addiction and Support for Addiction

研究代表者
中村　英代（NAKAMURA, Hideyo）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：５０６３５１９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、依存問題とそこからの回復を、社会環境を含めた視座からとらえなおすことにあった。その際、①資本主義社会における依存問題、②回復支援の共同体（薬物依存の回復支援施設ダルク、依存症からの回復のための世界規模の共同体である12ステップ・グループ）、③支援者の語りの考察という３つの課題を設定し、これらを総括することで社会学の観点から総合的に依存問題を明らかにした。理論的には、人類学者のグレゴリー・ベイトソンの分裂生成理論等に依拠した考察を行うことで、依存症とそこからの回復を考察するだけでなく、依存症の考察を経ることで、現代社会を生きる個々人の生きづらさと現代社会の傾向性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、個人病理として研究・臨床の対象とされてきた依存症を、社会学の視座からとらえなおした点にある。またその際、ベイトソンの理論に依拠しつつ、社会環境、回復の共同体、支援者の語りから依存症を総合的のとらえた点にある。
その結果、個人の問題とみなされがちであった依存症が、現代の社会環境のなかでは必然的に生じる行動であることを指摘した。そして、「もっともっと」と分裂生成的に展開する現状の社会の傾向性とそこを生きる個人の傾向性を導出し、回復コミュニティでの実践から、こうした現代社会の生きづらさからの解放の方途を示すとともに、弱さでつながり合う人類の共生のひとつの可能性を提示した。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to reconsider addictions and recovery from sociological perspectives. In doing so, we set three issues: (1) addictions in a capitalistic society, (2) recovery support communities (12-step groups, DARC: Drug Addict Rehabilitation Centers), and (3) consideration of the narratives of support persons.
By relying on anthropologist Bateson's theory, the study not only examined recovery from addictions, but also highlighted the difficulties of individual people living in modern society and the tendencies of modern society.

研究分野：社会学

キーワード：依存症　ダルク　アルコホーリクス・アノニマス　ナルコティクス・アノニマス　ベイトソン　質的調査　ナラティヴ　回復

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

依存症とは、ある行動をやめたくてもやめられなくなる状態のことであり、物質への依存（アルコールや薬物）、行動への依存（ギャンブル）などがある。違法薬物やギャンブルを中心に、依存問題に関連するメディア報道が絶えることのない現代、現状の丹念な調査・研究、依存問題が生み出される社会的背景の解明、予防・支援に寄与しうる研究への社会的要請は高い。

こうした依存問題は、これまで、個人病理として精神医学や心理学の治療・研究の対象とされるか、逸脱行為として刑罰・処遇の対象とされてきた。これに対して、筆者（本報告書）は、社会学に立脚して研究を進め、依存問題を社会環境と関係づけながら考察してきた。具体的にはダイエットへの依存状態とされる摂食障害、薬物依存を対象とした質的調査を行い、特に回復過程に着目し、当事者の語りから依存問題をとらえてきた。しかし調査研究を進める過程で、個人の語りに加えて、さらに多様な視座から総合的に依存問題をとらえる必要性を感じ、現代資本主義社会における依存問題、現代社会における依存問題への回復支援の現状の考察を課題とした本研究を着想した。

他方で、依存問題の領域では近年多様な変化が生じている。たとえば、快楽を求めて依存症に陥るのではなく、精神障害者や虐待経験者が苦しみからの解放を目的として薬物やアルコールを使用した結果、依存症に陥るという自己治療仮説などの新しい理論が提唱されている。実際、薬物依存の回復支援施設には、知的障害等さまざまな問題を抱えている人が多数いる。また、回復支援もかつては医師・専門家主導で行われてきたが、現在は、当事者が支援の現場をリードしている。

研究開始当初には、こうした状況があり、先行諸研究や申請者のこれまでの研究を踏まえつつも、新たな現象の丹念な調査と、依存問題を取り巻く現代の状況に即した研究が必要と考えられた。また、個人の病理／逸脱とみなされがちであった依存問題に、社会環境が大きく関与していることが明らかになれば、予防・支援のあり方も変わってくるため、本研究は予防・支援という臨床面でも大きな意義を有すると考えられた。同時に、本研究は、依存問題という個別事例を超え、現代社会の構造と現代社会を生きる人々の生を解明するという点において、現代社会論、社会問題論としての意義も有すると見込まれた。

２．研究の目的

上記でも確認してきた通り、これまで依存症は個人病理として精神医学や心理学の治療・研究の対象とされるか、逸脱行為として刑罰・処遇の対象とされてきた。しかし、依存問題の諸相は時代とともに変化しており社会環境との関係も強い。そこで本研究では、依存問題を広く社会環境からとらえなおすことを目的とした。

具体的には、１．現代資本主義社会における依存問題、２．回復支援の共同体（ダルク、12 ステップ・グループ）、３．支援者の語りの考察という課題を設定し、これらを総括することで総合的に依存問題をとらえることとした。そして、学術面でも、回復支援への寄与という実践面でも、社会科学領域における依存問題に関する基盤的研究となるべくまとめあげ、同時に、依存問題という事例を通して、現代社会の生きづらさの所在を解明しそこからの解放の方途を探ることで、現代社会論としても展開することとした。

３．研究の方法

本研究の研究方法は、以下の通りである。

質的調査としては、１）２か所のダルク（関東圏内の X ダルクと Y ダルク）でのフィールドワークとインタビューを行った。２）依存症の支援者 10 名（精神科医 4 名、精神保健福祉士１名、米国認定臨床心理士１名、保健師１名、看護師１名、保護観察官１名、弁護士１名）へのインタビューを行った。

資料調査としては、AA（Alcoholics Anomymous）の各種資料、NA（Narcotics Anomymous）の各種資料の検討を行った。

文献研究としては、主に、人類学者のグレゴリー・ベイトソンの著作の検討を行うことで、ベイトソンを本研究全体の理論的な視座として位置づけた。また、資本主義社会の考察のための視座として、経済学者の宇野弘蔵の著作の読み込みを行った。その他、国内外の依存症関係の先行諸研究の検討を行った。

４．研究成果

本研究の目的は、依存問題とそこからの回復を、社会環境を含めた視座からとらえなおすことにあった。その際、【課題①】資本主義社会における依存問題、【課題②】回復支援の共同体の考察、【課題③】支援者の語りの考察という３つの課題を設定し、これらを総括することで社会学の観点から総合的に依存問題を明らかにしていくこととした。その結果、それぞれの課題について、次の成果を得た。

【課題①　現代資本主義社会における依存問題の考察】

現在、資本のグローバル競争戦が世界規模で激化するなか、人々は高い生産性を求められたり、非正規雇用の職に就き不安定な生活を強いられたりしている。こうした社会環境では、生活不安や過労による向精神薬への依存、不安や緊張からの解放を求めての薬物・アルコール使用などが生じうる。他方で、ギャンブル産業の拡大によるギャンブル依存、スマートフォンやオンライン・ゲームへの依存など新しい形態の依存問題も次々と浮上している。そこで本研究では、資本主義社会の現状が、さまざまな水準で依存問題に関与していることを解明した。

とはいえ、本研究では、資本主義社会の個別の現象が依存症を生み出しているというとらえ方はしていない。ベイトソンの分裂生成理論に依拠することで、現代社会を生きる我々は、多かれ少なかれ「もっともっと」と何かを追い求める分裂生成的な行動パターンを有していることを指摘し、依存問題も、こうした現代人の行動パターンの延長線上で生じていることを明らかにした。

その上で、マルクスの「運動体としての資本」を把握し、資本主義社会の基本的な仕組みを確認した上で、以下で見ていくように、ダルクや 12 ステップ・グループという依存症の回復コミュニティの組織としての独自性を指摘した。

【課題②　回復支援の共同体（ダルク、12 ステップグループ）の考察】

本研究では依存問題が生み出される現代の社会環境のなか、いかなる回復支援が行われているかを明らかにした。そしてここで特に着目したのは、ダルクと 12 ステップ・グループである。

まず、ダルクとは、日本で薬物依存の当事者によって運営されている薬物依存のリハビリテーション施設のことである。1985 年に東京の荒川区に作られ、2021 年の時点では、北海道から沖縄まで全国に 89 施設のダルクがある。日本の薬物依存者の回復支援施設として、大きな役割を果たしている。

次に、12 ステップ・グループとは、AA（Alcoholics Anonymous）はじめとする、世界規模で展開しているという依存症の回復支援の共同体である。1935 年にアルコール問題の自助グループとしてアメリカで誕生した AA には、12 ステップ・プログラムという回復プログラムがある。12 ステップ・プログラムは他の依存問題にも用いられるようになり、薬物依存（NA：Narcotics Anonymous）などのグループが次々と作られていった。現在、12 ステップ・プログラムとそれに基づく共同体は世界中に普及し、依存症者のサポートと彼らの回復に絶大な影響力を持っている。

これまで、AA や NA の研究は国内外で相当数蓄積されてきたが、12 ステップ・プログラムの治療効果やプログラムを通じた自己変容といった臨床的な側面ばかりが問われてきた。こうした先行諸研究に対して、本研究では、ダルク（NA の回復プログラムに依拠した施設である）や AA という共同体は、依存症のセルフヘルプ・グループの形をとっている、現代の資本主義社会の原理（金銭の追求や就労の重視、上下関係のある人間関係など）と明確に距離を置く特殊な形態の組織であり、独自の規範、文化、運営システムがあることを明らかにした。

【課題③　依存症の支援者の語りの考察】

ダルクも 12 ステップ・グループも当事者コミュニティだが、そこでの活動は、さまざまな専門家との連携で成り立っている。また、依存症の支援といっても、ダルクや 12 ステップ・グループなどの当事者コミュニティにつながれない依存者の方が圧倒的に多い現実もあり、グループにつながれない依存者をサポートしているのが依存症の支援者たちだ。

そこで、課題③では、依存症の支援に長らく携わってきた 10 名の支援者にインタビューを実施し、彼らの支援の方法、そして彼らが回復をどのような状態とみなしているか（回復観）について聞き取った。以上の質的調査から、１）依存症の支援のあり方を考察し、それらを「変えようとしない支援」、「つなげる支援」、「相手から学ぶ支援」としてまとめた。そして、彼らの語りに依拠しつつ、２）依存症の支援の近年の変化の動向を明らかにした。

以上、課題①から③を総括し、現代社会における依存問題を個人・組織・社会システムから総合的にとらえた。現代資本主義社会では、将来を見通せない不安定な生活や貧困が社会問題化しているが、それはさまざまな種類の依存問題の契機ともなる。こうした社会環境のもと、苦しみや不安、病いを抱えながら生きざるを得ない現代人の困難な生を明らかにするとともに、回復支援の共同体の調査から、新しい組織のあり方やそうした共同体での人々の生活を描き出し、現代社会の生きづらさからの解放のひとつの可能性、弱さでつながり合うという人と人の共生の可能性を提示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 中村英代	４．巻 49-2
２．論文標題 発明品としてのコミュニケーション―依存症から考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 78-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中村英代
２．発表標題 コントロールを手放す―生きづらさからの解放とセルフヘルプ・グループ」
３．学会等名 令和2年度依存症フォーラム：アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題について、知ろう、考えよう（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 中村　英代
２．発表標題 コントロールを手放す―変えられないものを変えようとし続ける私たち
３．学会等名 こまば当事者カレッジ　2018年度冬期コース「生きづらさを考える」（東京大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村　英代
２．発表標題 依存症への臨床社会学からのアプローチ
３．学会等名 大阪大学　倫理学・臨床哲学研究室主催（大阪大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村　英代
２．発表標題 依存症における病いの語り―ナラティヴ･アプローチの立場から医療者に伝えたいこと
３．学会等名 第6回ナラティヴコロキアム（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 中村英代	４．発行年 2022年
２．出版社 光文社	５．総ページ数 264
３．書名 依存症と回復、そして資本主義	

１．著者名 日本発達心理学会、高橋 惠子、渡邊　寛、大野 祥子（中村英代「心の病いとジェンダー」p.226-238）	４．発行年 2022年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 316
３．書名 ジェンダ-の発達科学	

１．著者名 Jan Marie Fritz（Noguchi,Yuji & Hideyo Nakamura "Clinical Sociology in Japan”p95-107）	４．発行年 2021年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 339
３．書名 International Clinical Sociology(Clinical Sociology:Research and Practice): Second Edition	

１．著者名 西野　理子、米村　千代（中村英代「DV」p.164-165）	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 196
３．書名 よくわかる家族社会学	

１．著者名 小林 多寿子、浅野 智彦（中村英代「私利私欲を手放し、匿名の自己を生きる」p.178-201）	４．発行年 2018年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 304
３．書名 自己語りの社会学	

１．著者名 南保輔、中村英代、相良翔	４．発行年 2018年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 272
３．書名 当事者が支援する	

１．著者名 中村 英代	４．発行年 2017年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 200
３．書名 社会学ドリル	

〔産業財産権〕

〔その他〕

HIDEYO NAKAMURA Official Site
http://www.hideyonakamura.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関